**奈良　峰子 （なら・みねこ）**

**１、プロフィール**

歌人。昭和13年「芸林」創刊に参加し、尾山篤二郎に師事する。17年間在籍のち「花実」同人。41年「コスモス」に入会し、有力な同人として活躍した。

＜生没＞

1907（明治40）年１月15日～1999（平成11）年11月16日

＜代表作＞

『一つ湖』

＜青森との関わり＞

北海道生まれ。昭和17年八戸市に移住。35年夫兵亮と地方歌誌「氷炎」を発行。41年コスモス八戸勉強会を作る。

**２、作家解説**

本名はとみゑ。幼少の頃に、父が冬山で遭難死したことが峰子の性格形成に大きく影響し、作歌の動機もこの父の死に因って、昭和11年より作歌をはじめる。13年『新万葉集』に５首登載され、同年「芸林」が創刊され同時に入会し、尾山篤二郎に師事された。

17年に八戸市に移住する。30年に17年間在籍した「芸林」を退会し、「花実」同人となる。35年に夫兵亮と共に地方歌誌「氷炎」を発行し、地域の短歌の普及と後進の育成につとめる。

41年に「コスモス」に入会し、コスモス八戸勉強会を作る。30年より県短歌大会、北奥羽大会等の選者を担当し、青森県、八戸市の短歌の発展に尽力し、青森県歌人賞、八戸文化賞を受賞した。

旧い家の崩壊、没落の過程をつぶさに見て育った峰子にとって、家と家族、家族を貫く血の流れは宿命的であった。そのためか歌は定型を尊重し平明でありながら、少しの破綻もないが、どことなく暗い影に満ちている。それがまた峰子の歌の持ち味でもある。

峰子の歌は早くから注目されていて、「芸林」の時期の昭和25年に宮柊二から「批評のこまかい点につきましては只今省略しますが、非常に澄んで細い、しかも内容が外にちらず内に向かうという展に注目し・・・・・」と批評されている。

**３、資料紹介**

〇『一つ湖』

図書

1981（昭和56）年１月25日

195mm×135mm

昭和41年から55年までの14年間の作品から460種を厳選し、配列はほぼ年代順に編集された第１歌集。紋章、北の河、冬終らずの３章に分けて、宮柊二の題簽、著者の略歴、あとがきを掲載している。